

特集
青森
～雪と共に生きる人の知恵～

Special Features
AOMORI
Snow country wisdom

夏の暮らし

Life in summer

ねぶた・ねぶた祭り

成田 敏

NARITA Satoshi

青森県立郷土館/学芸課長



1—ねぶた・ねぶた

「ねぶた」や「ねぶた」は人形型や扇型の大きな灯籠を練り歩く行事で、毎年8月上旬に行われている。かつては最終日には、ねぶたを川や海に流したものであった。青森県内では、青森市や弘前市などの津軽地方一円や下北地方の各地で行われているが、特に青森市のねぶたが最も有名で規模も大きい。今や全国屈指の伝統的祭礼となり、昨年の観客数は約330万人であった。その魅力は巨大で華麗な人形灯籠が自在に動き回る様子と勇壮な囃子、そして誰でも参加できることである。

「ねぶた」「ねぶた」というのは、行事の名称であるとともに、祭りの主体となる灯籠の名称でもある。「もうわんつかでネプタだ」というと「もう少しでネプタ祭りが始まる」ということであるし、「ねぶたコ見にいぐべし」というと「ネプタ(灯籠)を見にいこう」ということであった。

現在、青森市は「ネプタ」、弘前市は「ネプタ」という名称をそれぞれ用いており、他の地区でもどちらかの名称を使用している。しかし、もともと各地では両方の名称

を併用していた。古文書などから考察すると古くは「ネムタ」で、それが「ネプタ」へ変わり、さらに「ネプタ」という名称も使われだしたといわれている。

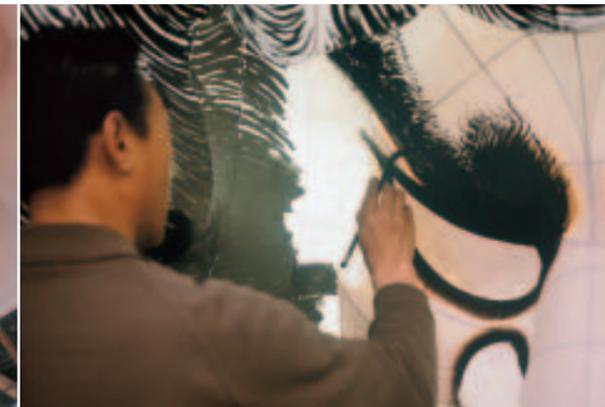
青森市で「青森ねぶた祭」という行事名が決まったのは昭和33年のことで、その前年に弘前市では「弘前ねぶた祭り」となった。戦前までは町内単位で行われる年中行事であり、はっきりした主催者などはなかったが、戦後になると各地区の商工会議所や観光協会を中心とした観光行事として行われるようになってきた。それでも、祭りの名称はあいまいであり、昭和32年の青森市のポスターには「青森ねぶた」と書かれているし、昭和29年の弘前市のポスターには「弘前ねぶた」とある。しかし、次第に観光客が多くなると明確な祭りの名称が必要となってきた。今まで併用されてきた「ねぶた」と「ねぶた」のどちらかを選んだ結果が「青森ねぶた祭」「弘前ねぶた祭り」であった。さらに昭和55年には、優れた伝統行事ということで国指定の重要無形民俗文化財に「青森のねぶた」「弘前のねぶた」として指定された。



■写真1、2—青森ねぶた



■写真3—紙貼り



■写真4—書き割り(墨書き)

青森市のねぶたはハワイ、フランスのニース、ロンドン、昨年は韓国のソウルなど世界各国にも出陣し、世界の火祭りとして喧伝されていった。そして、現在はイギリスの大英博物館にも展示されている。

2—青森ねぶた祭

「青森ねぶた祭」は青森ねぶた祭実行委員会の主催で毎年8月2日から7日まで行われる。6日までは夜に運行されるが、ナヌカビといわれる最終日の7日は昼に運行され、夜は海上運行と花火大会が行われる。中に明かりが灯った夜のねぶたは絵や色が引き立って華麗であるが、とりわけ海上運行は暗い海に浮かんだ灯籠が幻想的で美しさが際だつ。

青森ねぶたの特徴は、20数台の華麗な大型人形灯籠が運行コースを自在に動き回り、それに数台の大太鼓と笛、鉦(テブリガネと呼んでいる)の勇壮な囃子がつくことである。さらに、ハネトと呼ばれる大勢の踊り手がつき、「ラッセラー、ラッセラー」のかけ声で自由闊達に跳ねまわるのも魅力である。多いときには数千人のハネトが乱舞する様は実に圧巻である。ハネトは浴衣に花笠をつけるなど伝統的な衣装がある。ハネトには観光客なども自由に参加できるが、この衣装を身につけるのが条件である。近年、衣装の乱れがひどくなり、それがねぶた祭り全体の問題にまでなった。関係者が集まり、その対策について協議が行われた。現在はその努力が実って改善され、観光客などが安心して祭りを楽しめるようになっている。ハネトとともに、仮装したバケトと呼ばれる人たちも参加している。バケトは、自ら考案した奇抜な衣装を身につけてねぶたの周りを自由にうろつき、観客に愛嬌を振りまくので楽しめる存在である。

青森ねぶたは、かつては町内などの単位が主体で行われていたが、今は企業の運行団体が主体となってい

る。各ねぶたの運行は、高張り提灯を先頭に役員団や運行責任者などが並んで歩き、子どもたちが声を張り上げてかけ声をかけながら続く。その後ろにハネトが跳ね回り、そしてねぶた本体がやってくる。ねぶたは台車に乗せられていて20人ほどの曳き手がつく。扇子持ちと呼ばれる誘導係の合図でねぶたをグルグル回したり、観客のすぐ目の前まで持ってきて見せたりする。ねぶたの脇には、サスマタとよばれる細工をした長い竹竿を持った電線揚げの係がつく。ねぶたの大きさは高さ5m・幅9m・奥行7mと定められているが、見栄えのするようにできるだけ大きく作られるので、立木や電線などによく引っかかり壊れることがある。ねぶたの後ろには太鼓、笛、鉦の囃子方がつく。直径が1m程の大太鼓8台が一斉に打ち鳴らすと、観客の腹にずんずん響き迫り満点である。なお、囃子は県内各地で異なり、かつては青森市内の各ねぶたにあつてさえも少しずつ異なっていたという。

またすぐれたねぶたの奨励のため、ねぶたの審査が戦後から行われるようになり、現在に至っている。その年の最もすぐれたねぶたには「ねぶた大賞」が贈られる。以下、知事賞・市長賞・商工会議所会頭賞・観光協会会長賞があり、原則として上位5位までがナヌカビの海上運行に参加できる。なお、ねぶた大賞などは、ねぶた本体の出来だけでなく運行の統制、ハネト、囃子などを総合的に評価するもので、20名ほどの審査員の投票で決定される。

3—青森ねぶたの制作

ねぶたの制作は、かつては町内の手の器用な人たちが集まって行っていたが、昭和40年代頃から次第に「ねぶた師」という専門職が行うようになった。現在、大型ねぶた20台余を10数人のねぶた師が作っている。ねぶたは1台につき500万円くらいでねぶた師が請け負って作



■写真5—引前ねぶた

る。この金額は材料費や手伝ってもらう人の人件費も含まれているので、ねぶた師がこれだけで生計を立てていくのは困難である。ねぶた師によっては2台か3台を請け負っている人もいる。製作費に運行費用も合わせると、ねぶたを1台出すのに約2000万円が必要とされる。

その年のねぶたが終わるとねぶた師は翌年の構想を練る。青森ねぶたのテーマは、勇壮な日本、中国の武者や歌舞伎などの題材が多く用いられる。年が明けると下絵を描いて依頼主に見せて決定する。下絵はねぶたのイメージを依頼主に示すためのもので、かつては下絵を書かずに口で説明していた。立体的な構想は全てねぶた師の頭の中にあり、ねぶた師は自分の感性と経験だけで手足、面(顔の部分)、身体、他の装飾を組み合わせ、あの大きいねぶた全体を作り上げていく芸術家だといえる。



■写真6—五所川原 立佞武多

ねぶた作りの工程は、まず角材で基本の骨組を作り、針金で造形していく。中に電球、蛍光灯など照明具の取り付けをしてから紙貼りをする。紙は和紙(奉書紙)で、これには多くの人手を要するので毎年頼まれる女性などが専門に当たっている。次に書割りといって墨汁で顔、手足、着物など各部分を書き込む。また、蠟描きといって蠟を解かしたもの(今はパラフィンを使用)で特定の部分に模様をつける。蠟のついた部分には色がつかず、半透明になる。これは、ねぶた絵の特徴で中に照明が入ったときに効果を発揮することになる。次に染料や水性顔料で彩色し、最後に顔の目玉を墨で書き入れて(魂入れという)完成となる。できたねぶたを台上げといって大勢で台車に乗せ、提灯などで装飾し出陣を迎える。

戦前までのねぶた灯籠の中の照明はロウソクであったため、燃えることがたびたびあった。また、骨の材料は竹だったので造形がしづらく、^{だるま}達磨に手足のついたようなねぶたであった。戦後からは針金に変わったため、形を自由自在にできるようになり造形的に優れたねぶたができるようになった。

4—その他の主なねぶた・ねぶた祭り

1) 弘前ねぶた祭り(8月1日~7日)

弘前市は江戸時代まで津軽家が治める弘前藩の城下町であり、県内のねぶたでは最も古い伝統を有する。ねぶたの確かな記録で最も古いものは藩の『国日記』の享保5(1720)年の記事である。弘前ねぶたは現在、扇型をした扇ねぶたがほとんどであるが、明治の頃までは人形ねぶた(組ねぶたともいう)であった。扇ねぶたの場合、骨組みをそのままにして翌年に絵を描いた紙を貼り替えるだけでよく、制作経費が安いという利点がある。弘前市では青森市と異なり町内会が主体となってねぶたを出しているため、ねぶたを維持する経費は安くなければならなかった。大小60台余りが「ヤーヤドー」のかけ声で古都を整然と運行する有様は、風情があって青森市とは異なる趣がある。

2) 五所川原立佞武多(8月3日~8日)

五所川原市のねぶたの歴史については史料に乏しいため、詳しいことはよく知られていないが、明治時代には盛んに行われていたようである。明治40年頃の五所川原ねぶたとされる写真が残されているが、このねぶたは巨大で、高さは約30m、200人で担いだとされている。当時は、五所川原に限らず競って大型ねぶたを各地で作った。この巨大ねぶたを復活させたのが、現在の立佞武多であり、話題を呼んでいる。一般の人形ねぶ

たとともに3台の立佞武多が運行するのは圧巻である。

3) 黒石ねぶたまつり(7月30日~8月5日)

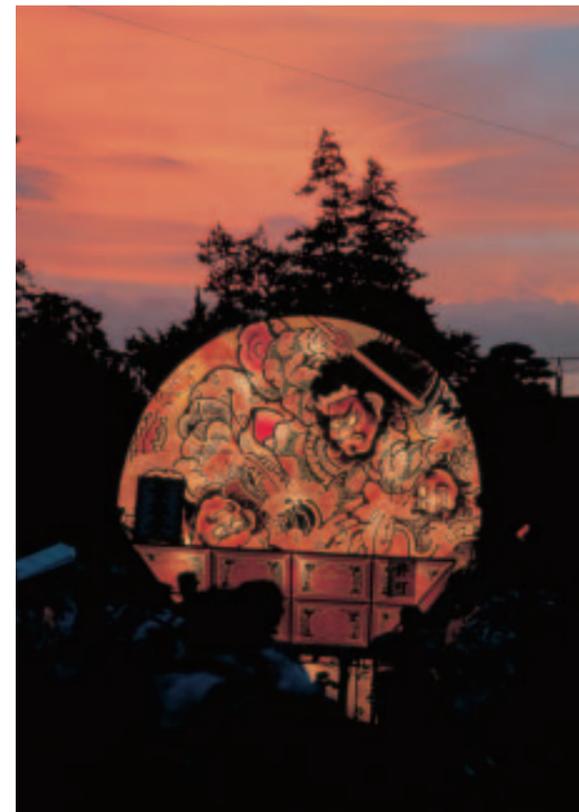
黒石市は黒石藩の城下町で、ねぶたは江戸時代から行われてきた。黒石ねぶたは、人形ねぶたと扇ねぶたが混在しているのが特徴である。特に人形ねぶたは古い伝統的な形態をそのままに残し、人形灯籠の造形も繊細でかつ迫力がある。黒石市だけでなく近隣の町村のねぶたも参加しているので運行台数は約80台で、これは県内一である。

4) 大湊ネブタ(8月初の金・土・日曜日)

下北地方で最も盛大なねぶた祭りが行われるのはむつ市の大湊地区である。ここは古くからの良港として知られ、戦前は軍港、現在も海上自衛隊基地港である。ねぶたは明治あたりから盛んになったようである。観客が見やすいように回転させる工夫が施された人形ねぶた10数台が地区内を練り歩く。あまり観光化していない素朴な祭りが特徴である。

5—ねぶたの由来

ねぶたの由来については諸説がある。その中のひとつに田村麻呂伝説にちなむものがあり、これがかつては一般的にいわれてきたことでもあった。坂上田村麻呂将



■写真7—黒石ねぶた(青森県提供)

軍が朝廷になびかないこの地の蝦夷を征伐にきたとき、蝦夷のゲリラ戦法に手を焼いた。一計を案じて、人形を作り賑やかに囃し立て、蝦夷が山から下りてきたところを捕らえたのがねぶたの始まりとされている。しかし、田村麻呂が青森県まで来た事実は全くなく根拠に乏しい。

弘前藩の祖である津軽為信にちなむ説もある。為信が京都にいた頃、田舎者といわれるので京都の人々を驚かそうと家臣に相談したところ、大提灯を出すことにした。これは、古文書にもあって史実らしく、その後も「津軽の大提灯」として続いたらしい。しかし、これが民間のねぶた祭りにつながって定着するというのも不自然である。しかも、ねぶたは他県にもよくある行事なのである。

最近では、ねぶたは「眠り流し」という全国にみられる民俗行事と共通のものであるという考え方が一般的である。これは、七夕の日に睡魔や災厄などを水に流してやる行事で、内容は地域によって異なるが全国的に行われている。かつてはねぶたを旧暦で行っていた。旧暦の7月7日、七夕の日がねぶたの最終日で、この日にねぶたを川や海に流したのであった。この日は「ネブタ流れろ、豆の葉とどまれ」と唱えたもので、意味はねぶた(眠気)を流してやって、マメ(健康)になろうということであった。これがねぶたを行う意味を最もよくあらわしている。

6—ねぶた・ねぶたへの思い

ねぶたは、歴史的に二つの大きな中断時期があった。ひとつは、明治時代になって、政府から派遣された初代の知事が「ねぶた禁止令」を出したことであった。県民は、何年かはおとなしくしたが、法令を無視してねぶたを出していたようであり、これは「お上にたてつく」ことであった。この初代知事は1年だけの在任で東京に帰った。そして明治14年に禁止令は解かれた。

もうひとつは、第二次世界大戦のさなか、もはや祭りどころでないということでねぶた祭りを中断したことであった。青森市の場合、昭和20年7月に大空襲を受け、終戦を迎えることになった。食べることが精一杯の生活の中で、青森市民は翌21年にねぶたを復活させたのである。これは、青森市民のねぶたに対する熱い思い入れをよくあらわしている。青森の短い夏に市民はエネルギーのありったけをねぶたにぶつけるのである。そして、ねぶたが終わると青森には秋風が吹くようになる。